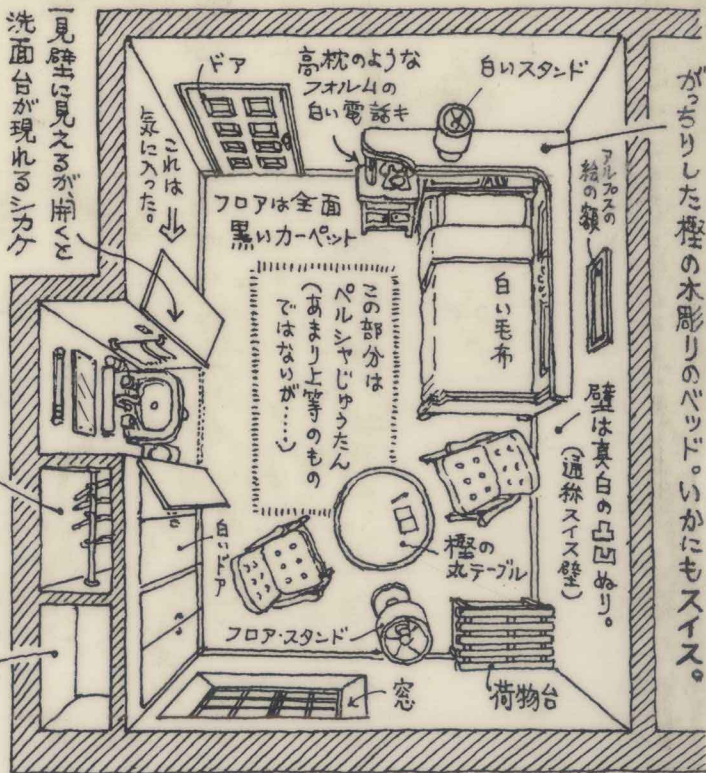


河童が覗いたヨーロッパ

Hotel FRANZISKANER telephone 051-340120
STÜSSIHOF STATT 1. ZÜRICH

チューリッヒの宿。地方色を感じられるのが楽しい。



世のおかっぱ
妹尾河童
(本名なのです) ↓

チューリッヒにくると、ビデがなくなった。ナルホド。ここはラテン系ではないことがよくわかる。窓のガラスが二重になった。冬の寒さがキビシイことを、窓が忠告してくれる。部屋を見わたして、その地方の風土や、おや、お国を感じることをオモシロがる。といっても、しお、しよせ、節穴からの覗き見ていどにすぎないのだがだが。。

河童かっぱが覗のぞいたヨーロッパ

才一刷発行 一九七六年十二月十日

才十刷発行 一九八一年三月二十日

著者 妹尾河童

発行者 矢崎泰久

発行所 株式会社 話の特集

東京都渋谷区神宮前四丁目三〇番六・七・八九

電話(〇三)四〇五—〇八二〇

製版・印刷 株式会社 大竹美術

製本 小泉製本所

△複印略し落丁本、乱丁本は本社にてお取替えします。

© 1976 KAPPA SENOH

河童かづぼが覗のぞいたヨーロッパ

妹尾せのお河童かづぼ

話の特集

河童が覗いたヨーロッパ

目次

- いいわけのまえがき……………6
- ピサの斜塔にはテスリがない……………8
- ミラノの飛び降り自殺……………12
- 列車は黙って発車する……………14
- ウィーンの市電の飛び降り資格……………16
- 野鳥と人たち……………17
- 握手と礼砲……………18
- パリのスイングドア……………20
- 北の人、南の人……………22
- ヨーロッパの空想……………24
- トカレフとワルサーP38……………32
- 武器博物館……………35
- なぜモテルガンが?……………36
- マツサージ器と10ギルダ紙幣……………38
- イタリアとドイツのオペラの始まる時刻……………40
- 走るポストと、公衆便所を小やすシカケ……………42

- ナホリの泥棒……44
- 旅の秘訣は、得点法……46
- 国際列車の車掌さんたち……48
- ヨーロッパの列車の中……64
- 優先席・禁煙車……82
- いいホテル……83
- ぼくが泊った安い部屋……84
- エジプト……86 ギリシャ……88 イタリア……90
- フランス……140 ベルギー……166 スイス……172 ドイツ……188
- スペイン……218 ポルトガル……234 オーストリア……236
- オランダ……250 デンマーク……252 スウェーデン……256
- ノールウェー……258 ソ連……260
- チェコスロバキア……264 ハンガリー……267
- イギリス……270 スコットランド……275 アイルランド……278
- メキシコ……280 アメリカ……284
- 女ものがき……295

いいわけのまえがき

一年間ヨーロッパのあちこちを歩いてきた。でもなんとなく申し訳ないような気持ちがつきまとう旅でもあった。自前の旅ではなかったからだ。

というのは、文化庁が毎年、海外へ送りだしている芸術家派遣研修のため一人としての旅であったからである。といって、どれほどの収穫を持ち帰れるかおぼつかなかった。人々が納めた税金を使っているという感じが、かなり気になった。しかし結果は、研修目的のオペラ、バレエ、演劇、テレビ、映画の周辺以外にも、好奇心の対象になるものが多すぎて、きわめて「河童的な旅」に

なってしまうた。

いままで自分なりに、ヨーロッパのものを見たり、聞いたり、かなりな数の人々ともつきあってきたつもりでいたのに、そこへ行ってみると、実に彼等のことを知らなすぎたのがよくわかった。

その土地ではごく当り前のことでさえ僕には驚きだったり、発見だったりした。風土が違えば当然、精神構造も変ってくる。その違いへの興味はもちろんだが、泊り歩いたホテルの部屋の手すりもその対象になった。その他、街角に見るものを初め、国際列車の車掌氏たちが国によってどう変わるかとか、各地の民家の窓が、その地方の気候風土とどのようにかかわりあっているか、

それを南から北へ順に比べてみると、どんなふうに変化していくのか？とか、各地にある城が時代や土地によってどう変り、どんな特徴をもっているか？果ては、各国のゴミにまで興味を抱く始末。まさにガラクタのコレクション。

それらをノートにかたづけ、ばしから、描きとりながら旅をつづけた。

帰国して調べたら22カ国歩いてきた。ホテルの部屋も「115室も泊っているよ」と友人がノートの記録を数えて教えてくれた。あまりの多さに赤面する。在外研修の旅が、こんなことでよかったのかどうか心もとないが、僕自身にとっては、実際にその土地へ行ってみなければ分らないものに小れる

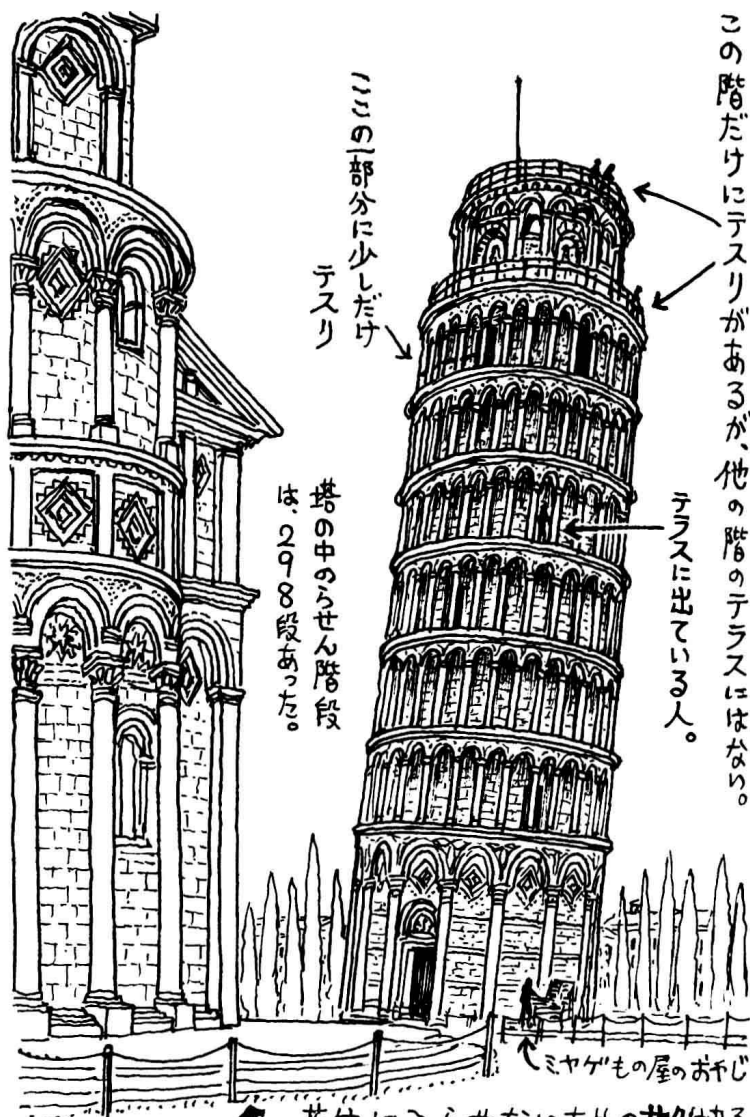
ことができたのはありがたかった。

友人たちは僕のノートをオモシロがって複写コピーで小冊子を作っては回覧していたが、ある日、これを一冊にまとめて本にしようという話にまで発展させてしまった。実にいいわけめくが、僕自身はそんなつもりで描いていたわけではなかったのだから抵抗した。恥ずかしいという感じを越えるのに、プロデューサー役を演じた友人が3人もバトンタッチしたほど、永い時間がかかった。公開するほどのものとは思えなかったし、とてもヨーロッパを見てきたといえるほどのモノでもなかったからだ。虫のいいお願いだか、どうかこれは「覗いた」というていどの個人的な記録である。といういいわけを、お許しください。

ピサの斜塔にはテスリがない

ピサの斜塔に登った。塔の中の内らせん階段をぐるぐるあがって最上階へ登れるようになっていた。その途中で各階のテラスに出てみるのも自由である。なんでも試みたがる僕は、当然テラスへ出てみた。驚いたことに、なんと、テスリがなかった。テスリがあるのは、最上階だけである。テラスは傾斜した上に、つるつるに摩滅した大理石のフロアで、巾は約一メートル。かなり注意しないと足を滑らせてまっ逆さまに墜落しそうだ。高所恐怖症ではなかったはずの僕も、足がガクガクする始末。壁にピッタリと背中と両手をくっつけて

ゆっくり一周してみた。かなり強烈なスリルであった。こんなことをする僕のようなもの好きは、あまりいないだろうと思ったが、フロアがかなりすりへっているところから推定してみても昔からかなりの人が試みたらしい。現に、その日も何人かがやっていた。観光客が集まる有名なこの歴史的な建物は、危険防止のテスリがないとは、いったいどういうことか？ さっそく塔の下で土産物を買っているおやじさんに聞いてみた。と聞いてもウマくしゃべれるわけではないから、いつもの伝でノートに描く。



この階だけにテスリがあるが、他の階のテラスにはない。

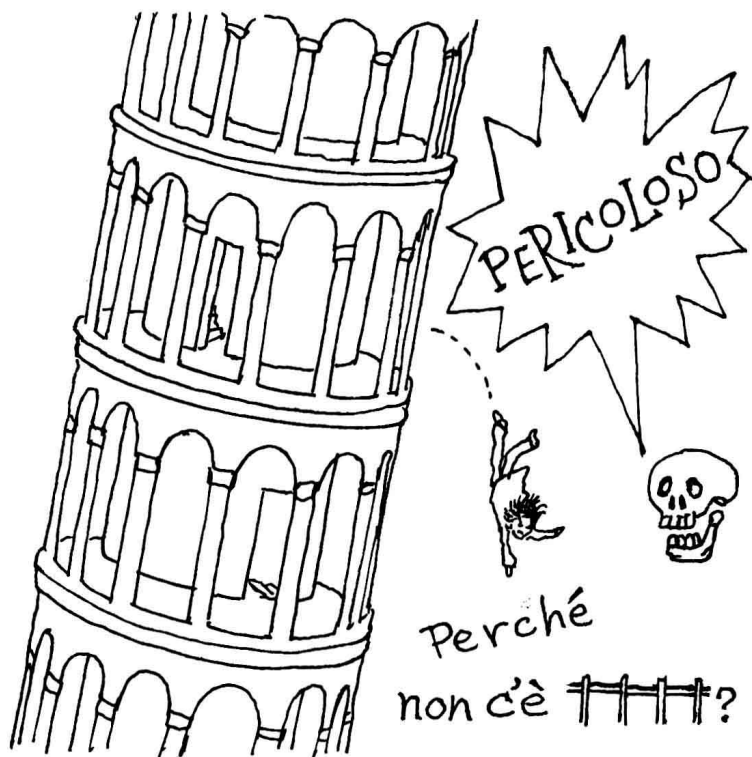
テラスに出ている人。

ここ的一部分に少しだけ
テスリ

塔の中のらせん階段
は、298段あった。

ミヤゲもの屋のおぢ

芝生に入らせないためのサクはある。



ピサの斜塔を描き、墜
 落する人間の絵と、「危
 険だ」「なぜ、テスリ
 がないのか？」と書き
 加える。そのノートの
 絵をみせながら、身ぶ
 り手ぶりのあやしげな
 イタリア語で聞いた
 わけ。すると、おやじ
 は変なことを聞く奴だ
 と思っただけ、両手
 を肩をすぼめて、
 「どうして？ 危ないと
 思う人は、テラスへ出
 ないだろう。出る人は
 それを承知でやってい



るはずだがね。この建物は建ったときからテスリがなかったんだよ。昔と違うのは、傾きがひどくなってきたことだけだ。……そんなことより、この絵葉書を買ってくれ」といった。僕は一瞬ドキンとした。なんと明快な答だろう。僕の質問と、返ってきた答のあいだにあるズレに、日本人とヨーロッパの人たちの精神構造の本質的な違いをハッキリ見る思いがした。

ミラノの飛び降り自殺

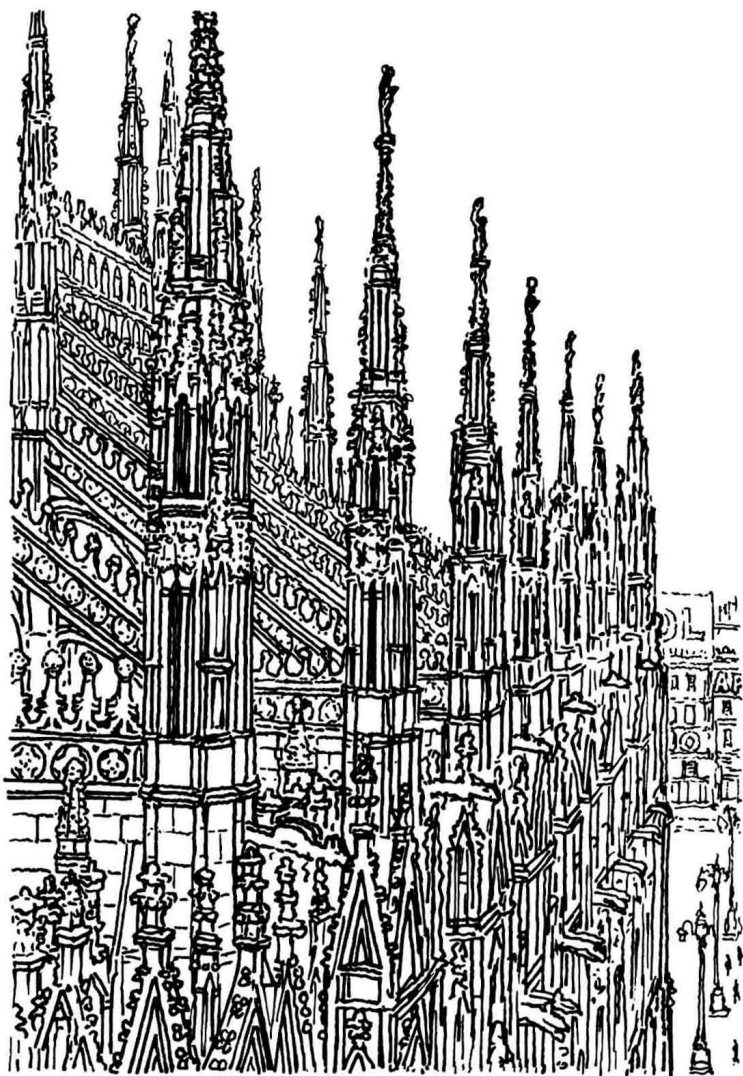
ミラノのドーモはゴシック建築の大聖堂として、その壮大さを知られている。天に向って突立ったっている尖塔の数は365本あるという。その華麗なデザインの見事さを、屋上にあがるとま近に鑑賞することができ、

ところがこの屋上から下界めがけて飛び降りる人がときたまあるそうだ。僕がこの町にいる間にも、男の人が飛び降りて、下にはいた乗用車の屋根をつぶして即死した。車の中の人もまきぞえにして、いったい教会はこれをどう考えているのだらうかと聞きにいった。こんどの話はヤヤコシイので通訳を友人にた

のむ。答えてくれる人になかなか出会えないので、たらい廻しにされた感じもあったが、最後に会ってくれた神父が「公式なコメントではないが」と前置きして、しゃべってくれたことは、

「自殺する人はごく少数である。その人たちの行為があるからといって、聖堂の屋上を金アミで囲って、多くの人たちの目から、美しいものを見える喜びを奪うことは正しいとは思えない。教会が本当にしなければならぬことは屋上に金アミを張りめぐらすことではなく、自殺という間違った考えを持つ人たちがいなくなるように、もっと神の教えを説くことである」と、またまたここでの答へも違っていた…。

ミラノのドームの屋上



列車は黙って発車する

ヨーロッパの駅では、列車や電車がホームへ入ってくるとき、それを知らせるアナウンスがない。つまり、日本のように「ただいま4番線に列車が入ります。危険ですから白線の内側にさがってお待ち下さい」という例のアナウンスがないわけだ。静かなホームへ黙って滑りこんでくる。彼等はいわせればきつとこういうだろう。「入ってくる列車を待っている人たちに、なぜ、列車がくるから危険だ」といわずに、いなければならぬのか？ ホームの端から少しさがって待っていることだ。つまり、前のごとくでしょう。どうして、いち

アナウンスで注意しなければならぬのかよくわからない。それぐらゐのことが自分で気をつけられないのですか？」と。

ヨーロッパの駅でも、ときどきアナウンスがあるときもある。でも、そんなときは注意して聞きとらねばならぬ。到着ホームの変更であったりするからである。アナウンスをするということは、伝達する必要がある内容をもっているということらしい。

発車するときも黙って出ていく。あのジーンとびびきわたる発車を知らせるベルも鳴らぬ。彼等はホームから列車が発車するのは当り前のことで、非常ベルのような警告が必要だとは思ってもみないだろう。

「列車が黙った状態のまま動きだすなんて危険ではないかと思つて、列車に乗るたびに気を付けてみていたがそんなことはいっこうに起りそうになかった。

発車ベルやアナウンスがなにかわりには、列車を発車させてもいいと、駅員と車掌が判断しなければ動きださないう。

客も動きださないう列車に文句をいれない。あるとき、僕は車掌氏に「かなりおくらしているね。」といつてみたら「列車を動かしているのは、時計と機械ではないの、ね。」といわれ赤面したことがあった。

だから、日本の国鉄のように秒ぎとみの正確さでダイヤ通り発着させることなど望めないう。また、あの日本の通勤ラッシュ時のものすごい混雑を運ぶことも、彼等に

は不可能なことだ。それはケタタマしいアナウンスや、駅員のあと押しのかつと、引きちぎりの作業なしでは成果があがらないはずだからである。

ヨーロッパでは車内で駅名を知らせるアナウンスもない。「車掌に聞かまわりの人に聞けばいいではないか」という。事実僕が降りたい駅名を近くの人に聞いたら、あちこちから「教えてあげるから安心していなさい。」という声が返ってきた。駅が近くなるとこの次の駅だよ。」と何人もがいつてくれた。これはどの国でもそうだった。彼等は車内で自分に必要のない駅名のアナウンスを乗っている間中きかされるなんて、ゴメンだと思つている。車内は静かな方がいいと。